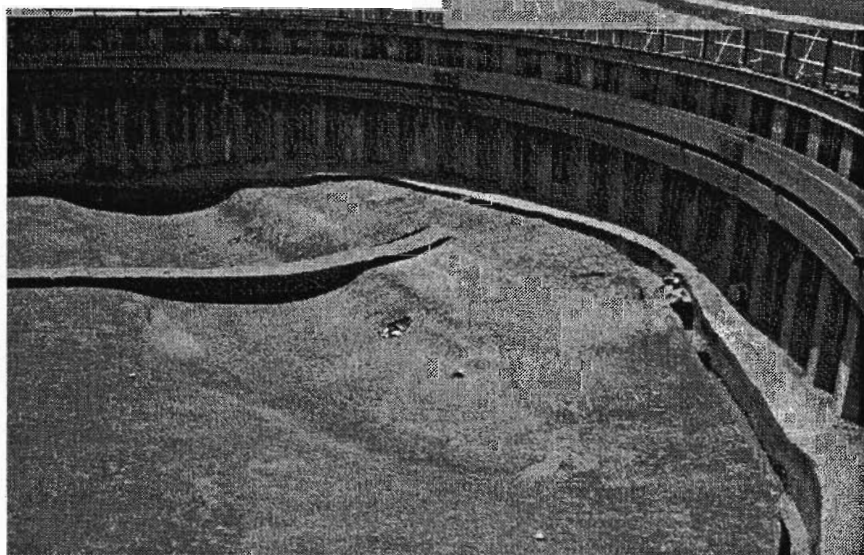
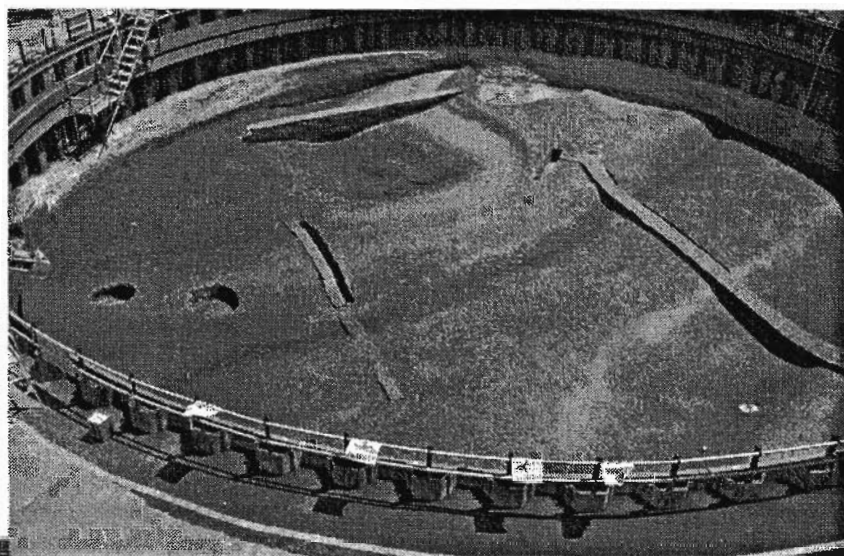


瓜生堂遺跡の調査



2002. 9. 15

(財) 大阪府文化財センター

瓜生堂遺跡の概要

瓜生堂遺跡は、東大阪市中央部に所在する縄文後期～中近世にわたる遺跡です。遺跡の位置は、縄文～古墳時代には河内潟・湖の岸辺、古代以後も旧大和川水系の最下流域にあたり、多くの河川が流れる場所にありました。

当遺跡では、これまでに50箇所以上で発掘調査が行われてきました。中でも、弥生時代～古墳時代前期についての当遺跡での調査成果は良く知られています。1970～1980年代に行われた調査では、方形の墳丘上に木の棺に遺体を収めて葬った墓が多数発見されました。この遺跡の調査を通じて、弥生時代の近畿地方では方形周溝墓と呼ばれるこの墓の形態が一般的だったと、広く知られるようになりました。

また、墓の様子だけでなく、掘立柱建物を中心とした弥生時代の集落も多くの地点で確認されています。隣接する巨摩遺跡・若江北遺跡を含めると南北約1km、東西約0.8kmといった広い範囲にわたり、弥生時代前～後期（約2200～1800年前）に集落が作られ続けたことがわかっています。また、一部では弥生時代の水田跡も発見されました。

このように、弥生時代中期の集落・墓・農地といった多様な活動の痕跡を知る上で、瓜生堂遺跡を中心とする遺跡群は重要です。また、多量の出土土器・木製品は弥生時代～古墳時代の生活文化を知る貴重な資料となり、銅戈（銅製の武器）や青銅製品鑄型の出土は、特殊な祭祀や金属生産の実態を伝えています。



弥生時代の大坂平野と瓜生堂遺跡

今回の調査成果

今回の発掘調査は、地下河川立坑建設に伴って行っています。そのため、調査区は径約30mの円形で、面積は約700㎡と小規模です。しかし、今回の調査では弥生時代中期の墓地をみつけることができました。

弥生時代中期後半（約2000年前）の方形周溝墓群

この調査区の地表面下約3.5～4.5mでは、弥生時代中期後半（約2000年前）の土器を含む土層がみついています。この土層には、地点によっては高さが1m近くも盛り上がっているところがありました。詳しく調べると、盛り上がった部分は、溝を掘ってその内側に盛土をして作った、「方形周溝墓」だったことがわかりました。

このような方形周溝墓は2基発見されています。どちらも、調査区の南半にあります。東側に位置する方形周溝墓Ⅰでは、古墳時代前期の河道の水の流れによって墳丘が壊され、棺の一部にまで破壊が及んでいました。西側に位置する方形周溝墓Ⅱも、その西半が調査区外にあり、正確な大きさや形はわかりません。しかし、2基とも、墳丘の一边が15m以上、高さは1m程度あったと考えられます。

遺体を葬る

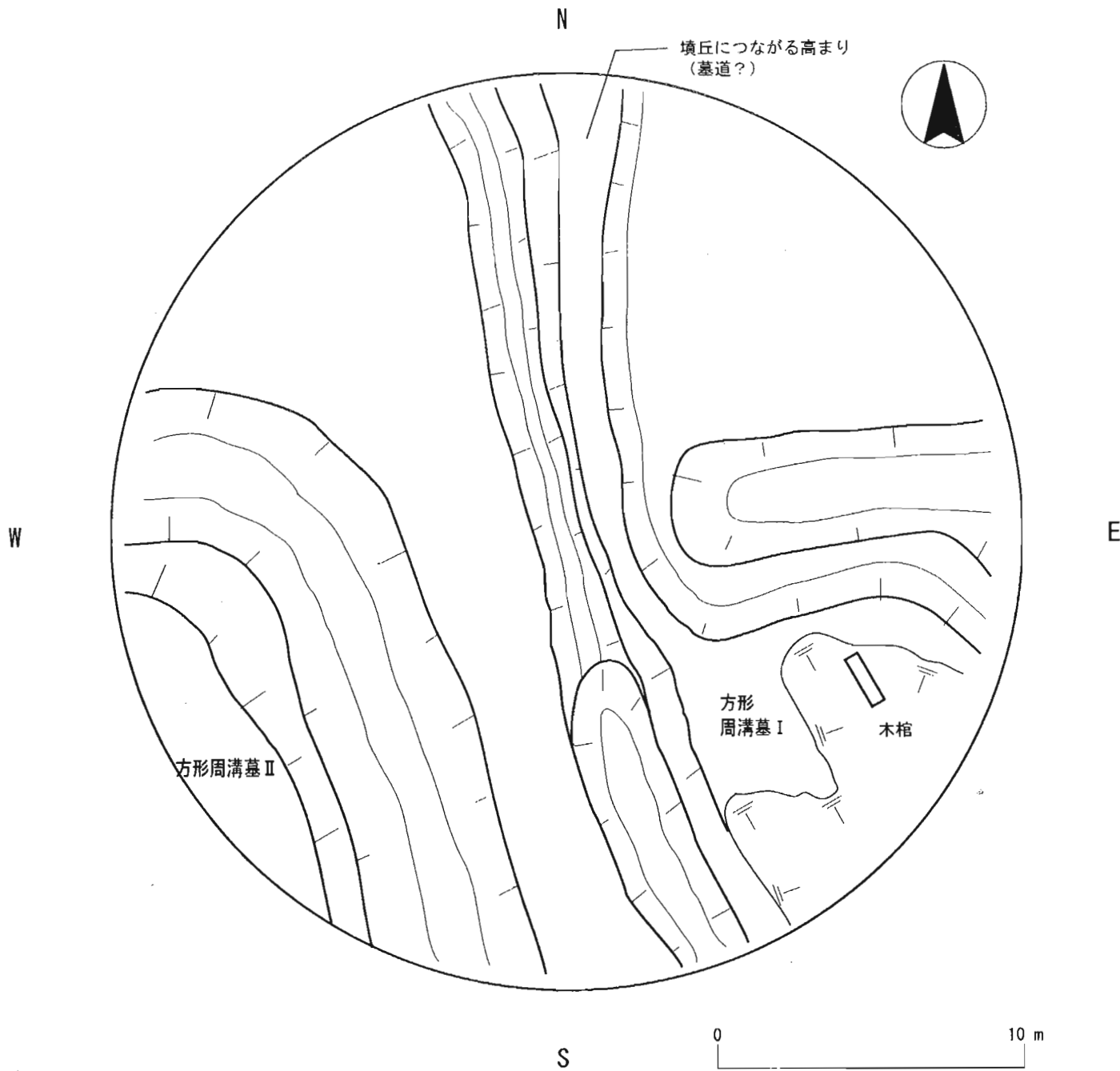
今回発見された方形周溝墓では、板を組み合わせた棺（木棺）が発見されています。墳丘の上に穴を掘り、遺体を納めた木棺をそこに入れて埋めて葬ったと考えられます。また、墳丘の上や周囲には、土器が置かれていました。このような土器は、遺体を埋葬する前にお祭りに使ったものと言われています。また、方形周溝墓Ⅱの溝には、木の棒が4本捨てられていました。このような土器や木製品からは、方形周溝墓の墳丘の上でも、何かお葬式のようなことが行われたことが想像できます。

墓につながる高まり

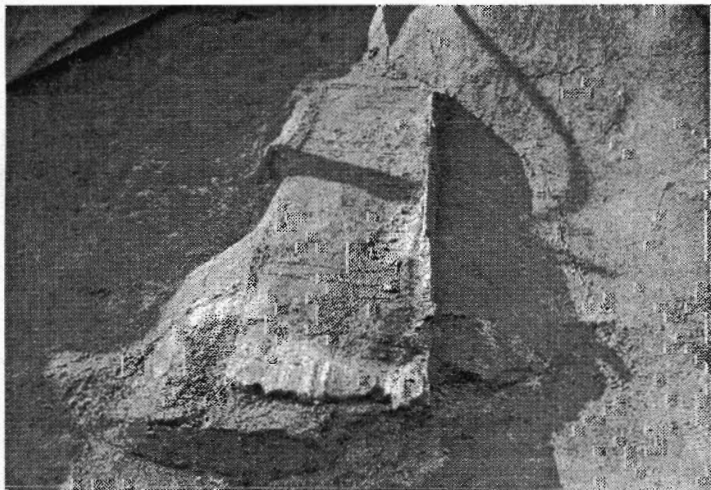
また、方形周溝墓Ⅰの北西隅は周溝が途切れて、墳丘から高まりが続き、堤のような形で北へと伸びています。北側から方形周溝墓Ⅰの墳丘へ至る道の可能性があります。集落と墓地、墓と他の墓地をつなぐ道とも考えられます。

弥生時代の瓜生堂遺跡とその周辺

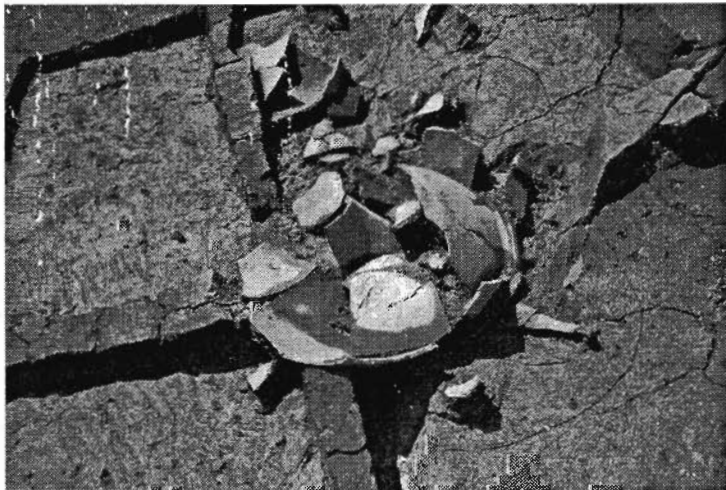
これまでの調査成果とあわせると、瓜生堂遺跡と隣接する巨摩遺跡で検出された弥生時代中期後半～後期初頭の方形周溝墓の数は、合計70基以上にもおよびます。これまでの調査成果からは、1ha程度の範囲に密集した方形周溝墓群が4～5箇所近接してあったこととなります。瓜生堂遺跡には、4～5個の集団があり、それぞれに墓地を作っていたのではないのでしょうか。



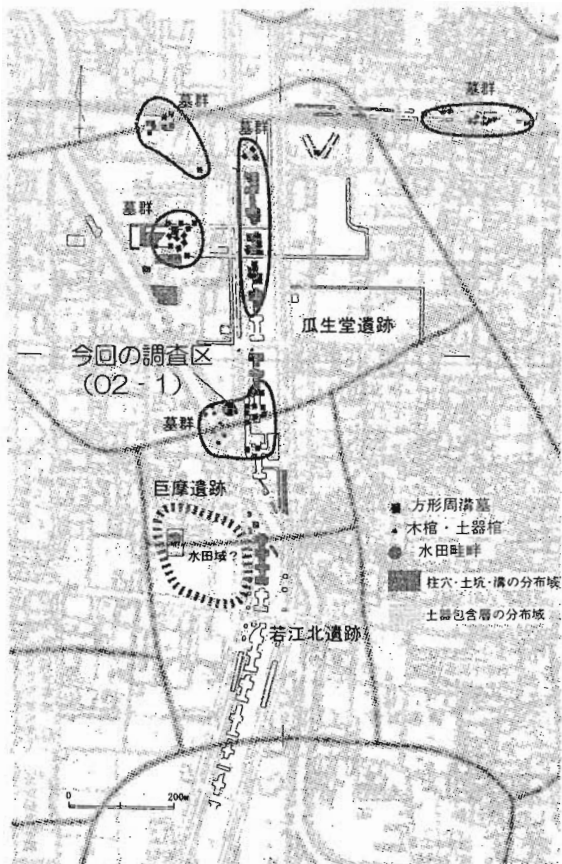
瓜生堂遺跡(O2-1 調査区)
 弥生中期後半遺構図(S=1/200)



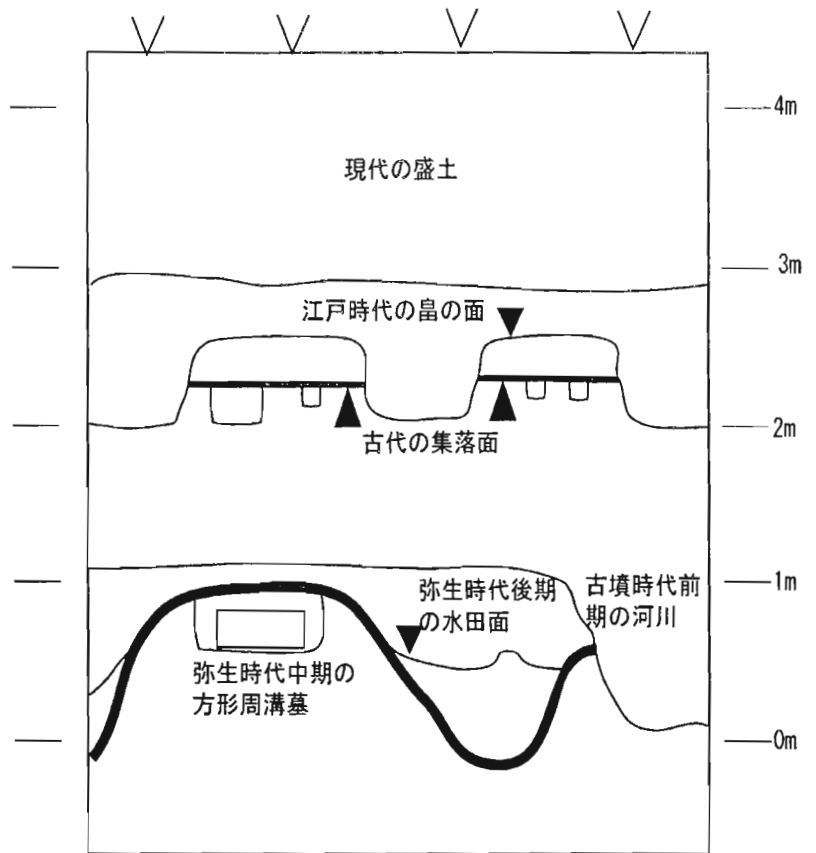
遺体を納めた木棺



方形周溝墓の周囲に置かれた土器



弥生時代中期後半の瓜生堂遺跡とその周辺



瓜生堂遺跡02 - 1調査区の土層堆積模式図

その後の瓜生堂遺跡

墓地を耕す？

方形周溝墓がつくられた後、まだ残っている墳丘にとりつくようにつくられた水田の畦が見ついています。墓を作ったあと放置された墓地は、川の流れがもたらす泥に覆われて溝が埋まり、平らな湿地となりました。その湿地と高まりを利用して水田が作られていたようです。僅かな出土土器からは、弥生時代後期の間に水田利用されていたと推測できます。水田を作った人達は、数十年～百年前にはここが墓地だったことを知っていたのでしょうか。



弥生時代後期の水田跡



奈良時代～平安時代の建物群

古代の建物群

地表面から約2.5mの深さの地層には奈良時代の終わりにから平安時代（8世紀末～9世紀）を中心とする掘立柱建物群が見つかりました。この建物群の中には板組みの井戸が作られていて、中から、墨で字や記号を書いた土器が見つかりました。また、小さな穴からは、銅銭を5枚入れて収めた土器が出土しました。建物に接して、お祭りの行われた跡と考えられます。たくさんの建物の跡や土器から、瓜生堂遺跡の西半分は、古代になって、役所などの重要な施設が作られていたと考えられます。

江戸時代の畠

約1.5～2mの深さの地層では江戸時代の畠の跡が見つかりました。部分的に掘り下げて、その土をつんで、島状の高まりをつくり、畠にしていたようです。江戸時代には、この土地は農地となり、開発が及び始める30年位前までその状態が続いていたようです。